ナンパ野郎の災難　*Beach Stud Busted by MVP*

それは美しい夏の朝だった。ポールは浜辺に立って、海を眺めていた。太陽はまだ空の頂点に達していなかった。浜辺はしだいに人が集まりはじめたところだった。よく晴れた静かな日だった。波が静かに寄せては返していた。

ポールは２０歳。１８０センチで体重７０キロ、均整のとれた体つきをしたハンサムな青年だった。彼もそのことはよく心得ていた。彼の振る舞いは、自惚れとすれすれの、自信に溢れていた。毎日、この砂浜でナンパしたが、しくじったのは数えるほどしかない。ポールにとって、今年の夏も楽しく過ごせそうな予感がしていた。

不意に、背後から何者かがポールに忍び寄り、いきなり彼の睾丸を掴み、さっと手を離した。ポールは慌てて周囲を見回した。

１０メートルばかり離れた波打ち際に、一人の少女が微笑んでいた。十二歳くらいだろうか、とても可愛らしく、明るいブラウンの髪をしていた。中肉中背で、濃い赤のワンピースの水着をしていた。

ここ数日、よく見かける子だ、とポールは気づいた。

「いったい、どういうつもりだ？」
ポールは言った。落とした女たちにならばともかく、こんな小娘から生殖器に悪戯されても、痛いだけで嬉しくもなんともない。
「スケベなナンパ野郎」
少女は毒づいた。
「夏になってから、ずっとここで女の子を物色してるじゃない。私はあんたみたいな男はうんざり。友達もみんな、嫌がってるの。だから、ここにはもう来ないで。ナンパなら、よそでやってよ」
「ふん、そうかい」
ポールは小馬鹿にしたように鼻を鳴らした。
「言っとくけど、俺はここにいるよ。お前らの指図は受けない」
「あ、そう」
少女は言った。
「じゃあ、ここに来る度に、金玉を握られることになるけど、いいの？　次はもっと痛い目にあうよ」
「俺を脅迫してるのか？」
「脅迫じゃないよ。事実そうなるって言ってるの。あんたは、いつの間にか私や私の友達に忍び

寄られて、金玉を握られたり、蹴られたり、あるいは針で刺されたりすることになるの。いつもびくびくしてる羽目になるでしょうね。だから、四の五の言わないで、さっさと帰って、もうここには来ないほうが身のためよ。嘘じゃないよ。私たちはやると言ったら、ほんとうにやるんだから」
ポールは信じられないという顔つきで立ちすくんだ。彼は口をぽかんと開けたまま、悪魔のような計画をとくとくと喋る少女を見つめていた。
ほんとうにやる気なのか。ほんとうに、そんなことを一緒にやらかす友達がいるのか。彼には見当もつかなかった。
少女は、嘲るように彼を見つめていた。ポールは、とにかく、このままにはしておけない、と思った。彼は、少女に近寄っていった。
少女はポールの行動を読んでいたらしい。彼女はさっと身を翻し、海に飛び込んだ。
ポールは、海に入って彼女の後を追った。彼は泳げなかったから、歩いて追うしかなかった。しだいに水面が、ポールの腰へ、腹部へ、胸へと上昇してきた。彼は周囲を見回した。少女の姿は水面上から消えていた。
見失ったのか。

そう思った瞬間、いきなりポールは下腹部に鋭い痛みを感じた。誰かの手が、彼の睾丸をひねったのだ。

ポールは慌てて、両手を海に突っ込み、股間を抑えたが、後の祭りだった。ポールは目を皿のようにして、水面下を見つめた。だが、何も見えなかった。

ポールは呆然となり、次の攻撃に備えて立ち尽くすしかなかった。だが、それっきり、何も起こらなかった。

不意に、１５メートル離れた沖合に、少女の頭がぽっかりと浮かび上がった。彼女はこちらを見て笑っていた。ポールは彼女を凝視しながら、そろそろと波打ち際まで後ずさった。同じく攻撃を受けるならば、海中よりも陸上のほうがいい。

だが、もし彼女を捕まえたとしても、どうすればいいだろう。もし相手が男ならば、殴り倒せばいい。だが、小さな女の子を殴るなんてことはできなかった。彼女に住所を白状させ、母親に訴えることはできるだろう。だが、あの気の強そうな少女が素直に白状するとも思えなかったし、ましてや母親は彼の言うことを信じようとはしないだろう。かえってもっと厄介なことになりそうだ。

ライフガードに助けを求めようか。だが、何を言えばいいと言うのか。１２歳の女の子に金玉を握られ、脅迫を受けたと言うのか？　あるいは友達に助けを求めるか？　笑い物になるだけだ。

ポールは自分の無力さに驚いた。ひたすら、あの小娘の不意打ちに怯えているしかないという

のか。だが、他に何ができる？

ふと、沖合に浮かんでいた少女が、水に潜った。

ポールは次の攻撃に備えた。水は浅く、履いていた海水パンツは水面上にあった。ポールは浜辺から顔を背け、知らぬ顔をして静かに待った。

期待どおりだった。水面からにゅっと少女の手が彼の股間めがけて伸びてきた。

ポールはすかさず、その手首をつかみ、彼女を水面から引っ張り出した。

だが、彼女もまた、それを予想していた。彼女は水面から飛び出すなり、左足で立ち、右足の膝小僧を、ポールの無防備な股間に打ち込んだのだ。

ポールは睾丸に重い衝撃を受け、彼女の手を離し、体を折り曲げた。すかさず、彼女は彼の向こう脛にタックルした。ポールは仰向けに倒れた。

ポールはパニックに陥った。そこは浅かったから、立とうと思えば立てるはずなのに、彼は水をばしゃばしゃ撥ね上げながら転げまわった。

やっと顔を水面上にあげたが、まだ尻は海底に着いたままだった。彼は、はあはあと荒く息をした。

次の瞬間、またもやポールは股間に凄まじい痛みを覚えた。

少女は彼の背後にいた。脇腹から手を回し、彼のパンツに両手を突っ込み、睾丸とペニスを物

凄い力でひねりあげたのだ。
ポールは絶叫した。だが、身を反らしたとたんに頭が海中に没し、悲鳴も波に掻き消された。
彼は空気を求めてあがき、やっと頭だけ水面から出すことができた。彼は叫ぼうとした。だが、少女の冷静な声がそれを押し止めた。彼女の両手は、ポールの生殖器を握ったままだった。
「どうするつもりなの？」
少女は、クスクス笑いながら言った。
「ライフガードを呼んで、ちっちゃな女の子に苛められてるから助けてくれって言うつもり？」
ポールは途方にくれて口を閉じた。すかさず、少女がまた彼の睾丸をひねった。さきほどよりは軽くひねられただけだが、まだ睾丸はひりひり痛んでいた。ポールは必死に悲鳴を押し殺した。
「もっとひどい目に合わせてあげようか」
少女が言った。
「男じゃなくならせることもできるのよ、色男さん」
ポールは苦痛に喘ぎながら、やっと言った。
「何が望みだ？」
「あんたの海水パンツ。すぐに脱いで」
「え？　なんでそんなものを……ううぐぐぐっっっ！！」
少女がまた睾丸をひねりあげ、ポールは恐ろしい激痛に呻いた。

「わ、わかった……脱ぐよ……脱ぐ！」
ポールは叫んだ。少女は少しだけ力を緩めた。ポールは海水パンツを脱ぎはじめた。少女は、ポールの生殖器を掴んだまま、じっとポールを見つめていた。
ポールはパンツを脱ぎおわって訊ねた。
「それで？」
「パンツを離して」
少女は命令した。
「馬鹿なことは考えないでね。おとなしく言うことをきけば、離してあげるから」
ポールは頷き、パンツから手を離した。少女はゆっくりと警戒しながら、生殖器から両手を離した。もっとも警戒は無用だった。ポールのペニスと睾丸は激しく痛み、ちょっと身を捩っただけでも全身に電流が走るような苦痛を味わわされるのだから。
少女は、彼のパンツを手にして立ち上がり、彼を見下ろした。ポールは両手で股間を覆ったまま座り込んでいた。さらに蹴られるのを警戒しているようだった。
「心配しないで」
少女は優しく言い、波打ち際へと歩きはじめた。
「すぐに返してあげるから」
ポールは、動けないまま、少女が砂浜へとあがっていくのを見つめた。彼女は、椅子に座った

ライフガードに近寄り、海水パンツを差し出し、ポールを指さしてなにごとか話しかけた。ライフガードは笑ったように見えた。そして、海水パンツを受け取り、ポールに近寄ってきた。

ポールは、そのライフガードを何度か見かけていた。彼もまた、ポールの顔を知っていたに違いない。

彼は、必死に笑いをかみ殺していた。眼には軽蔑の色がありありと浮かんでいた。

「おい」

ライフガードは海水パンツを差し出した。

「あの子が、これをあんたに返してくれ、だとさ」

それきり口を噤んだが、どうやら彼は、少女が無理やりにその海水パンツを奪い取ったことを知っているようだった。

ポールは、股間が水面上に浮かび上がらないように気をつけながら、海水パンツを受け取った。

「どうも……」としか言えなかった。

「じゃあな」

ライフガードは、踵を返して砂浜へと向かっていた。表情は見えなかったが、肩がかすかに揺れていた。

ポールはその後ろ姿を見つめながら、今日のうちに、この話は浜辺じゅうに広がるに違いない

と確信した。

それからしばらく、ポールは苦痛と虚脱とで、動けぬままその場に座り込んでいた。

やっと痛みが幾分和らいだので、立ち上がり、そろそろと波打ち際へと歩きはじめた。一歩、足を踏み出す度に、鋭い痛みが股間に走った。睾丸が完全に回復するまで、あと何日かかるだろう。

浜にあがったとき、彼の眼は、彼のメミシス（復讐の女神）に釘付けになった。彼女は、大きなシートに上に寝そべり、数人の同じ年の少女たちとお喋りの最中だった。肩肘をついて頭を載せ、脚をぶらぶらと揺すりながら、彼を見つめていた。

彼女の友人たちは、彼の存在に気づかないようだったが、少女は、私だけが真相を知ってるんだぞ、と言わんばかりにちらちらと彼を見ていた。その満足そうな視線が、ポールの神経を責め苛んだ。

彼は完全に打ちのめされた。彼女の言うとおり、二度とこの浜辺に来ることはできない。彼は、たった一人の、十二歳の小娘に屈伏したのだ。

ポールは、振り向きもせず、浜辺を去った。